

はじめに - 大陸移動説と気候変動

人間は建築を通して、自分たちの秩序を大自然に刻みつけてきた。ところが大自然は時として思わぬ災害を人間社会に及ぼす。なかでも地震は太古から人のもっとも恐れる自然災害だった。

地球の表面は岩盤のような地殻が、どろどろしたマントルという岩石の上に浮かんだ形にできている。その上に土や水が貼りついて人間や植物、動物が生息する。地殻の薄い部分が海となり、厚いところが大陸だ。地震とは地球の中にある力が働いて、地殻やマントルの上部で破壊が起こる現象をいう。マントル上部の地殻はゆっくりと動いている。十数枚の地殻（プレート）が押し合って山を作ったり、他のプレート下へもぐり込んだりする。大陸は移動しているのだ。

大陸移動説は1910年代に生まれた。ウエゲナーが大陸移動説を思いついたのは、諸大陸の形がちょうどパズル合わせのようにはまり合うことに気づいたからだった。1960年代以降は大陸が動くという現象が常識となり、プレート境界型地震の原因も説明できるようになった。しかしいつどこで地震が起きるかは予測が難しい。プレート内の地殻変動で起きるいわゆる直下型地震となれば、その原因がよく分かっていない。でもいつか必ず起きることは間違いないといわれる。日本列島では日本海溝や南海トラフ、相模トラフがプレート境界として知られている。



ポロス島（エーゲ海クルーズにて）

天変地異は気候変動も原因となる。氷河期の終わった約一万年前には氷が溶け始め、徐々に海水面が100m以上高くなった。途中で氷河の急激な溶解に伴う地震も起きた形跡がある。海水面の上昇、海進は大がかりな津波つまり大洪水になる。黒海と地中海をつなぐボスフォラス海峡もそのタイミングで生まれた。日本列島では瀬戸内海や東京湾が海進によって生まれたといわれる。世界中のさまざまな地域で伝わってきた創世神話はこれらの天変地異と関係しているらしい。

ギリシア本土とエーゲ海諸島、イタリア南部、そして地中海東岸部からトルコ、シリア、エジプト、メソポタミア地方は地震や洪水、火山爆発など大災害に見舞われて手痛い被害を受けてきた。紀元前3000年頃からオリエントのメソポタミア地方に大がかりな灌漑農耕とともに王権が成立し、民族の興亡と戦争を繰り返した。紀元前500年頃にはギリシアが、続いて紀元前後からローマが地中海世界の覇権をとった。日本という国家ができるよりずっと前の出来事だ。これらの地域では、人々の住宅や建築（したがって生活）と宗教、政治経済の体制もまた自然災害の歴史とともに歩んできた。

「古典震災論」は、古典時代（おもに古代ギリシア・ローマ時代）の東地中海地域における災害記録と当時の古典書、近年の考古学的調査などにもとづいて、人々の生活再建、震災復興、建築・都市計画の有り様をさぐるようとする試みである。